

和 40 年頃から都市化が徐々に始まっていた我孫子町では、行政側が住宅公団の進出に積極的な受け入れ体勢を示していた。近郊農村としての限界を感じ、都市化による経済発展を期待していたのであった。この公団住宅「湖北台団地」完成とともに市制を施行し、それ以後、急に活気づいた我孫子市は、いわゆる東京近郊のベッドタウンとして発展した。湖北台団地完成は交通の発達を促し、また、その交通の発達が、新たな大規模宅地開発を次々と呼び起こした。同じ市内でも、都心から時間距離のある布佐地区では、都市化が遅れており、農村的景観がかなり残るが、純農村地域であった湖北地区は、公団進出により、環境整備の進んだ典型的な新興住宅地になった。また、従来のもっとも発展していた我孫子地区でも、既成市街地の外延的拡大だけでなく、常磐線沿線の大規模宅地開発が進められている。人口は、昭和 40 年 10 月に 33,216 人だったのが、52 年 10 月には 88,173 人となっている。

我孫子市はこれまで、環境の良い住宅地として人をひきつけてきた。松戸市のように都市化による悪影響はまだそれほど現われていない。今後も、人口急増の予想される我孫子市としては、綿密な都市計画によって、自然の改変や人口の増加によって起こる問題を最小限にとどめ、“環境の良い住宅地”としての位置を保っていかねばならないと思われる。

松江市の市街化と都市機能

宇津巻 睦 子

松江は江戸時代十八万石の城下町として、当時全国でも数少ない三万の人口を持つ都市であった。しかし明治以降、都市の発展はゆるやかであり、相対的に小さな都市となっていった。そのため市街地の拡大もわずかで、城下町のなごりを留めて現在に至った。城下町から出発した松江が、どのような変遷をたどって現在にいたったか、現在の地域構造はどのようなものか、又、人口が急増しているとはいえ全国の県庁所在地に比べ増加率が低いのはなぜか、などを考え、松江の都市としての性質を明らかにするのが論文の目的である。

第一章で地域の概観を述べ、第二章で、人口の推移を指標として次の 4 つの時期、(1)江戸時代・人口漸増期 (2)明治時代・人口停滞期 (3)大正～昭和 40 年・人口漸増期 (4)昭和 40 年以降・人口急増期、に時代区分し、それぞれの時期の市街地の拡大状況、地域構造の変化など地形図・市街図から読みとり、市街化の変遷を考察した。第三章で、松江の工業、商業機能や都市圏の問題を、統計操作を中心に考察した。第四章で、松江市の地域構造の現況をフィールドワークからまとめた。

市街化の変遷：江戸時代は、武家地、町屋、寺町と政治的計画的に居住区分がなされ、機能の分化した地域構造であった。明治時代は、人口は停滞しており、市街地の拡大はみられなかった。上級武家地であった殿町に役所や学校が建てられ、それらを核として城下町の地域構造から近代都市の地域構造へと、地域が再編成された。大正～昭和 40 年は、明治 41 年、市街地をはずれた水田に鉄道駅が開設されたことを機に、駅の方向に市街地の拡大が始まった。他に市街地の拡大はみられず、この時期は、都市の発展が停滞していたといえる。昭和 40 年以降、人口の増加に伴い、新しい市街地が主な

道路に沿って大きく拡大している。又、都心部の再開発事業を機に、業務地区化、商業地区化と、機能分化のきざしが現れている。

都市機能：情報文化・業務管理機能などは、県都として充実している。しかし商業機能においては、機能の相対的な低下がみられる。これは松江の東西に位置する米子、出雲の商業機能が充実してきたためである。通勤圏をみても、米子・出雲の影響で、松江の通勤圏は東西に狭くなっている。松江は米子・出雲にはさまれ、都市の勢力が伸び悩んでいる。そのため、島根県東部・出雲地方の一地方都市の域を出ていない。ゆえに他の県庁所在地にみられるような急激な人口増加がないといえる。

地域構造：機能別土地利用概況図の作成から、機能別に地域が未分化であることがわかった。その理由として、市街地が南北に分断されているため、都市の強力な核となるものを欠き、そのため、事務所、官公署などが分散的に配置された。又、経済基盤の弱い県の県都として都市の活動が今まで不活発であったことが考えられる。機能別に地域が未分化であるために、都市機能が充分発揮できない。これは、松江市の商業機能が低下している遠因ともなっている。

三里浜砂丘地域の農業

河 合 みゆき

三里浜砂丘地域には、全国の80%の生産を誇る特産物“花ラッキョウ”がある。この花ラッキョウ栽培の立地要因を探ってみると、砂丘地という特性を十分に生かしている事がわかる。まず自然条件から見ると、砂丘地は地力不足であり乏水性である。よって、そこで栽培し得る作物も自ずと限定されるが、ラッキョウは元来塩害、風害、乾燥害に対して強く、吸肥力も強い作物であるため、数少ない無漑水作物として砂丘地に好適である。又、生産されるラッキョウの品質面から見ても、地力不足である砂丘地での栽培は小粒を生産する事になり、分球肥大するにつれて露出し、緑化する事を飛砂により防止できるので色の白いラッキョウが収穫できる事になる。一方、人文条件からみると、一般に商品作物は全国的需要供給の変化を受け易いが、ラッキョウは生物ではなく漬物であるため価格の安定がある。そのため、生産者は“米の代わりにラッキョウ意識”を持っている。又、三里浜砂丘地域のラッキョウはラクダ系福井在来種の、当地独特の二年掘り栽培により、品質面では独占的であり、集荷・製造・加工・販売の一元化を行なっている三里浜特産農協があって、商業ルートも確立されている。それらにより、ラッキョウに関しては産地指導型の価格形成ができ、農家自身が計画生産できるという長所がある。

ところで、三里浜砂丘地域の開発は、このラッキョウの生産拡大による農業開発により始まった。それ以前は、砂丘後背水田や集落に対する飛砂の害が著しく、それを防ぐ砂丘の固定化が進められており、砂丘地自体の利用はなされていなかった。そして、代表的な“出稼ぎ・行商の供給圏”となっており、川西地方の中でも第2種兼業化が最も進んでいる地域であった。しかし、砂丘地農業としてのラッキョウ栽培が盛んになるに従って、砂丘上の保安林は次々と伐採され、川西地方の中でも最も農家一戸当たり経営耕地面積が大きく、然も裕福な地域となり、従って第2種兼業化の最も進んでい